

地域スポーツ教室の継続に関わる要因の検討

—参加した親子の気分状態および継続意志に着目して—

長崎国際大学人間社会学部 元 嶋 菜美香
宮 良 俊 行
熊 谷 賢 哉
田 井 健太郎

Investigation of factors related to continuation in community sports classes

—Paying attention to mood and continuing intention of participating parents and children—

Namika MOTOSHIMA, Toshiyuki MIYARA, Kenya KUMAGAI, Kentaro TAI

Nagasaki International University

キーワード (Key Words) : 地域スポーツ (community sports)

継続意志 (continuing intention)

気分 (mood)

はじめに

1. 児童生徒をとりまくスポーツ環境

児童期の子どものスポーツ実施には、年齢や性別といった人口統計学的要因、運動の楽しさや自己効力感といった心理的要因、保護者の支援や友人・指導者からのソーシャルサポートといった社会文化的要因、身体を操作する能力といった身体的要因、児童自身の生活習慣や過去のスポーツ経験など、様々な要因が関係する(文部科学省, 2002; Sallis et al., 2000; 高井, 2005)。子どものスポーツ実施率の低下の背景には、運動に対する苦手意識(深谷他, 2000)や生活様式の変化に伴い日常生活において体を動かす機会が減少したこと(文部科学省, 2002)に加えて、スポーツに不可欠な時間、空間、仲間や指導者などによって構成されるスポーツ環境の整備不足により、運動・スポーツを全く行わない児童生徒が増加している(笹川スポーツ財団, 2015)。現代の児童生徒は、塾や室内遊びの増加に伴う外遊びやスポーツ活動時間の減少、空き地や公園などの遊び場の減少、少子化によるスポーツを

する仲間の減少により、スポーツを実施する機会そのものが減少し、スポーツの継続が困難になっている(文部科学省, 2002)。

「国民の誰もが、それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現する」ことを目標としたスポーツ立国戦略(文部科学省, 2010)が策定され、スポーツ庁が第2期スポーツ基本計画を制定し、スポーツ参画人口の拡大による「1億総スポーツ社会」の実現を掲げた(文部科学省, 2017)ことから明らかなように、スポーツ環境を整備し、スポーツの継続率を向上させることは社会的に取り組むべき課題となっている。また、大学等が保有する人材や施設といったスポーツ資源を効果的に活用したスポーツ活動を実施することにより、地域住民の運動・スポーツへの参加意欲を高め、スポーツを通じた地域コミュニティの活性化を促進する「大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業」(文部科学省, 2013a)が推進されるなど、ス

スポーツ環境の整備に関して大学への期待は大きく、児童生徒をはじめとした地域住民のスポーツの継続のために大学が果たすべき役割も大きいと考えられる（文部科学省，2015）。

2. スポーツの継続要因

スポーツの継続に関わる要因として、「運動強度」（ACSM, 2011）、「指導者との交流」（松本他，2004：中野・沖村，2014）、「仲間との交流」（金崎他，1989）、「心理的効果」などが挙げられる。心理的効果に関して、運動継続を達成するためには運動によって心理状態が向上することが重要であること（鍋谷・徳永，2001）、運動に対する認知や情動が運動実施を規定すること（樋上他，1996）が示されており、心理的要因に着目しスポーツの継続率を向上させることを目的とした介入研究も行われている（橋本・斉藤，2015：竹中，2005）。運動を通してポジティブな心理状態を体験することが運動に対する好意的態度に影響を与えることから、スポーツを継続するためには運動後のポジティブな心理状態を体験することが重要である（橋本・斉藤，2015：徳永・橋本，1979）。また、児童生徒や保護者のスポーツに対する態度や価値観を短時間の地域スポーツ教室で形成・変容させることは難しいが、気分状態はプログラムの内容によって変化させることが可能であることから、地域スポーツ教室の継続意志に影響を与える重要な要因であると考えられる。

一方で、高強度の運動は快感情の低下あるいは不快感を増大させること（橋本・斉藤，2015）、指導者から受ける関心や指導者との交流が情動に影響すること（米丸・鈴木，2015）、同じ軽運動であっても身体接触を伴うことで身体接触を伴わない軽運動に比べて気分状態が良好に改善されること（金他，2014）などから、「運動強度」、「指導者との交流」、「仲間との交流」は運動後の気分や感情に関係する要因であることが示されている。また、「体育授業における学習意欲を規定する期待・感情モデル」（西田，2004）では、体育授業における学習意欲は対人関係や過去の運動経験などの変数が期待や感情を媒介として体育授業の学習意欲に関係するとの知見が示されている。

スポーツの継続に影響を与えるその他の要因として、参加者の性別や年齢、運動経験の有無、保護者のスポーツに関する理解や態度などの属性が挙げられる（多々納・厨，1980）。特に、児童生徒は多くの時間を保護者と過ごし、保護者のフィードバックに強く依存することから、児童生徒のスポーツ教室の継続意志には保護者の満足・コミットメント・干渉・励まし影

響するが（渡辺他，2015）、児童生徒と保護者がともに参加した多様なスポーツ種目を提供する地域スポーツ教室での体験が継続意志に与える影響については明らかにされていない。スポーツの継続に関して、自身の児童生徒の競技力向上のみを重視してスポーツクラブの退会・継続を決定する保護者の存在が指摘されているが（永井，2007）、性別や年代、運動経験を問わず多様な地域住民が参加し、複数のスポーツ種目の体験を目的とする地域スポーツ教室における保護者の継続意志に関係する要因は異なることが推測される。また、児童生徒と保護者が地域スポーツ教室に期待する要因が異なることから（谷口他，2007）、地域スポーツ教室の継続に関して重視する要因も異なる可能性が推測される。これまで児童生徒もしくは保護者の視点から調査が行われてきた継続意志に関わる要因を比較検討することで、児童生徒および保護者の両者のニーズに対応した地域スポーツ教室を提供するための知見を得られると考える。

3. 本研究の目的

以上のことから、本研究では、スポーツ心理学事典（荒井，2008）および先行研究（有光，2002）を参照し、「比較的時間が長く、強度が弱い感情」を気分と定義し、「地域スポーツ教室への継続意志」と地域スポーツ教室への継続意志に影響を及ぼす諸要因との関係の中で、参加者の「気分状態」がどのように媒介するかについて検討することを目的とした。

児童生徒では、「運動強度」、「指導者交流」、「参加者間交流」の3要因が「地域スポーツ教室への継続意志」に直接影響するモデルに、3要因が「気分状態」を媒介して間接的に「地域スポーツ教室への継続意志」に影響するパスを加えた仮説モデルを設定した（図1）。一方、保護者では、「運動強度」、「保護者－指導者交流」、「児童生徒－指導者交流」、「親子交流」の4要因が「地域スポーツ教室への継続意志」に直接影響するモデルに、4要因が「気分状態」を媒介して間接的に「地域スポーツ教室への継続意志」に影響するパスを加えた仮説モデルを設定した（図2）。仮説モデルの妥当性を検証することで、社会的課題であるスポーツ参加者の増加を目的として大学が提供する地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者の地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因や属性について明らかにすることができると考える。

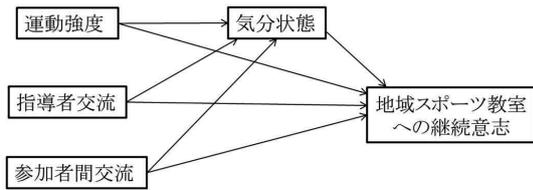


図1 児童生徒における地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因と気分状態を媒介する仮説モデル

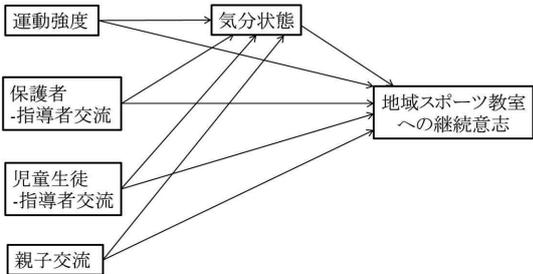


図2 保護者における地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因と気分状態を媒介する仮説モデル

方法

1. 対象者

平成28年にN大学にて実施された地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者を調査対象とし、550サンプル（児童生徒334サンプル，保護者216サンプル）を回収した。

2. 実施内容

対象とした地域スポーツ教室は、性別や年代、運動経験を問わず多様な地域住民が参加し、複数のスポーツ種目を体験することを目的としてN大学が開催しており、体育館などの大学施設を使用して土曜日の19

時から21時に1回1種目のスポーツを2時間行い、計20回のスポーツ教室を実施した。実施期間は、平成28年6月4日から12月17日であった。実施したスポーツ種目は、アーチェリー、親子体操、空手道、剣道、バレーボール、ラケットスポーツであった（表1）。各プログラムの作成およびスポーツ指導は、大学教員、運動部に所属する大学生、教職課程に所属する大学生、スポーツクラブの指導者などが担当した。

表1 地域スポーツ教室の実施種目と参加者数

実施種目	実施回数	参加者	
		児童生徒	保護者
アーチェリー	2	48	30
親子体操	3	37	30
空手道	3	44	30
剣道	3	43	26
バレーボール	3	57	31
ラケットスポーツ	6	105	69
合計	20	334	216

3. 手続き

1) 地域スポーツ教室の継続意志に影響を与える要因の測定

児童生徒に対して、フェイスシート（名前、種目経験の有無）および「運動強度」、「指導者交流」、「参加者間交流」に関する調査項目について、各地域スポーツ教室実施後に5件法での回答を求めた（表2）。

また、保護者に対して、フェイスシート（名前、種目経験の有無、参加形態）および「運動強度」、「保護者-指導者交流」、「児童生徒-指導者交流」、「親子交流」に関する調査項目について、各スポーツ地域教室実施後に5件法での回答を求めた（表3）。

表2 児童生徒における地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因の質問項目

項目名	質問内容	回答方法
【運動経験の有無】	〇〇(種目名)をするのは、今日がはじめてですか？	1:はい(未経験者), 2:いいえ(経験者)
【運動強度】	今日のスポーツ教室の運動はどうでしたか？	1:かなりきつかった, 2:きつかった, 3:ややきつかった, 4:楽に感じた, 5:かなり楽に感じた
【指導者交流】	大学生となかよくできましたか？	1:かなりなかよくできた, 2:ややなかよくできた, 3:どちらともいえない, 4:あまりなかよくできなかった, 5:まったくなかよくできなかった
【参加者間交流】	ともだちとなかよくできましたか？	1:かなりなかよくできた, 2:ややなかよくできた, 3:どちらともいえない, 4:あまりなかよくできなかった, 5:まったくなかよくできなかった

表3 保護者における地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因の質問項目

項目名	質問内容	回答方法
【運動経験の有無】	これまでに〇〇(種目名)を体験されたことはありますか？	1:体験したことがない(未経験者), 2:体験したことがある・指導を受けたことがある(経験者)
【参加形態】	本日、あなたはどのような活動をされましたか？	1:スポーツ教室の活動にお子様と一緒に参加した(参加), 2:スポーツ教室の活動には参加せず、見学をした(見学)
【運動強度】	今回のスポーツ教室の運動強度はいかがでしたか？ 見学されていた方は、お子様の様子から運動強度をどのように感じたかを教えてください。	1:かなり楽に感じた, 2:楽に感じた, 3:ややきつかった, 4:きつかった, 5:かなりきつかった
【保護者-指導者交流】	保護者の方と学生スタッフとの交流はありましたか？	1:かなり交流があった, 2:やや交流があった, 3:どちらともいえない, 4:あまり交流がなかった, 5:まったく交流がなかった
【児童生徒-指導者交流】	お子様と学生スタッフとの交流はありましたか？	1:かなり交流があった, 2:やや交流があった, 3:どちらともいえない, 4:あまり交流がなかった, 5:まったく交流がなかった
【親子交流】	保護者の方とお子様との交流はありましたか？	1:かなり交流があった, 2:やや交流があった, 3:どちらともいえない, 4:あまり交流がなかった, 5:まったく交流がなかった

表4 児童生徒および保護者における地域スポーツ教室への継続意志に関する質問項目

項目名	質問内容	回答方法
【地域スポーツ教室への継続意思】	また、スポーツ教室に参加したいですか？	1:かなり参加したい, 2:やや参加したい, 3:どちらともいえない, 4:あまり参加したくない, 5:まったく参加したくない

2) 気分状態の測定

児童生徒の気分状態の測定には、子ども版二次元気分尺度（坂入他，印刷中）を使用した。現在の気分状態について、各スポーツ教室実施後に「活性度」（-5：だらけた，まったく元気のない状態～5：イキイキした，元気いっぱいな状態）および「安定度」（-5：イライラした，まったく落ち着かない状態～5：リラックスした，とても落ち着いた状態）の2項目に対して、イラストと数字を組み合わせた11件法での回答を求めた。また、「活性度」および「安定度」の2項目の得点を合算した「快適度」得点（-10：不快～10：快適）を算出し、逆転処理を行い「気分状態」として分析に用いた。なお、2項目版の二次元気分尺度の基準関連妥当性は既に確認されている（Sakairi et al., 2013）。

保護者の気分状態の測定には、8項目の二次元気分尺度（坂入他，2009）を使用し、各スポーツ教室実施後に6件法での回答を求めた。「活性度」および「安定度」の得点をそれぞれ算出し、「活性度」および「安定度」の得点を合算した「快適度」得点を算出した。「快適度」得点に対して逆転処理を行い、「気分状態」として分析に用いた。

3) 地域スポーツ教室への継続意志の測定

児童生徒および保護者に対して、「地域スポーツ教室への継続意志」に関する調査項目について、各スポーツ教室実施後に5件法での回答を求めた（表4）。

4. 分析の手順

地域スポーツ教室の児童生徒および帯同した保護者から得られた550サンプルのうち、6歳以上の対象者から得られた欠損値のないデータ（児童生徒272サンプル，保護者186サンプル）を分析対象とした。地域スポーツ教室の継続意志に関わる要因の変数間の影響を検討するために、統計処理ソフト IBM SPSS Amos 24を用いて児童生徒および保護者から得られたデータに対してパス解析を行い、「地域スポーツ教室への継続意志」に対する標準化直接効果、標準化間接効果を算出した。また、児童生徒の属性（種目経験の有無）および保護者の属性（種目経験の有無，参加形態）による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った。適合度は、GFI, AGFI, CFI, RMSEAの各指標から検討した。有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得た。児童生徒および保護者に対して、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって本調査への協力の承諾を得た。調査当日に保護者が同伴していない児童生徒のデータ（12サンプル）は分析の対象から除いた。

結 果

1. 児童生徒

1) 気分状態媒介モデル

児童生徒（ $N=272$ ）のデータを分析した結果（図3）、適合度指標はGFI=.999, AGFI=.986, CFI=1.000, RMSEA=.000であり、モデルの妥当性が確認された。決定係数は、「気分状態」は $R^2=.20$ 、「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.29$ であった。なお、有意ではなかった「運動強度」から「地域スポーツ教室への継続意志」へのパスを除いて最終モデルとし、適合度を算出した。個別にパス係数をみると、「運動強度」（ $\beta=.15, p<.01$ ）、「指導者交流」（ $\beta=.20, p<.01$ ）、「参加者間交流」（ $\beta=.25, p<.001$ ）から「気分状態」の間に有意なパスが確認された。また、「気分状態」（ $\beta=.33, p<.001$ ）、「指導者交流」（ $\beta=.16, p<.01$ ）、「参加者間交流」（ $\beta=.21, p<.001$ ）から「地域スポーツ教室への継続意志」の間に有意な正のパスが確認された。「地域スポーツ教室への継続意志」に対する標準化直接効果は、「指導者交流」では0.16、「参加者間交流」では0.21、標準化間接効果は、「運動強度」では0.05、「指導者交流」では0.07、「参加者間交流」では0.08であった。

2) 種目経験の有無による差異

児童生徒の種目経験の有無による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果（図4）、適合度指標はGFI=.999, AGFI=.978, CFI=1.000, RMSEA=.000であり、モデルの妥当性が確認された。決定係数は、未経験者（ $N=102$ ）では「気分状態」は $R^2=.17$ 、「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.28$ 、経験者（ $N=170$ ）では「気分状態」は $R^2=.23$ 、「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.32$ であった。パラメーター間の差の検定を行ったところ、「参加者間交流」から「地域スポーツ教室への継

続意志」へのパス係数および「指導者交流」と「参加者間交流」の間のパス係数が有意に異なっていた ($p<.05$)。

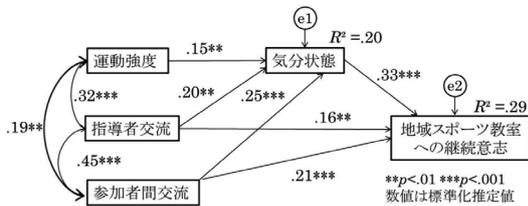


図3 地域スポーツ教室に参加した児童生徒における気分状態媒介モデル

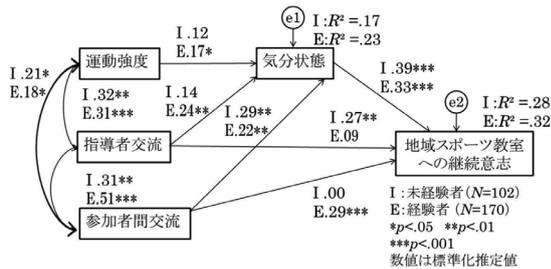


図4 地域スポーツ教室に参加した児童生徒における種目経験の有無による多母集団の同時解析

2. 保護者

1) 気分状態媒介モデル

保護者 ($N=186$) のデータを分析した結果 (図5), 適合度指標は $GFI=1.000$, $AGFI=.997$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であり, モデルの妥当性が確認された。決定係数は, 「気分状態」は $R^2=.07$, 「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.21$ であった。なお, 有意ではなかったパスのうち最もパス係数の低い「運動強度」から「地域スポーツ教室への継続意志」へのパス ($\beta=.02$) を除いて最終モデルとし, 適合度を算出した。また, 標準化直接効果および標準化間接効果の算出のために, 他のパスを含めてモデルの適合度を算出した。個別にパス係数をみると, 「児童生徒-指導者交流」 ($\beta=.20, p<.05$) から「気分状態」の間に有意なパスが確認された。また, 「気分状態」 ($\beta=.22, p<.01$) および「保護者-指導者交流」 ($\beta=.40, p<.001$) から「地域スポーツ教室への継続意志」の間に有意な正のパスが確認された。「地域スポーツ教室への継続意志」に対する標準化直接効果は, 「保護者-指導者交流」では0.40, 「児童生徒-指導者交流」では0.04, 「親子交流」では-0.09, 標準化間接効果は, 「運動強度」では-0.02, 「保護者-指導者交流」では-0.01, 「児童生徒-指導者交流」では0.04, 「親子交流」では0.03であった。

2) 種目経験の有無による差異

保護者の種目経験の有無による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果 (図6), 適合度指標は $GFI=.999$, $AGFI=.970$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であり, モデルの妥当性が確認された。決定係数は, 未経験者 ($N=89$) では「気分状態」は $R^2=.04$, 「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.25$, 経験者 ($N=97$) では「気分状態」は $R^2=.12$, 「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.21$ であった。パラメーター間の差の検定を行ったところ, 有意差は認められなかった。

3) 参加形態による差異

保護者の参加形態による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果 (図7), 適合度指標は $GFI=.999$, $AGFI=.989$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であり, モデルの妥当性が確認された。決定係数は, 参加者 ($N=63$) では「気分状態」は $R^2=.08$, 「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.16$, 見学者 ($N=123$) では「気分状態」は $R^2=.12$, 「地域スポーツ教室への継続意志」は $R^2=.24$ であった。パラメーター間の差の検定を行ったところ, 有意差は認められなかった。

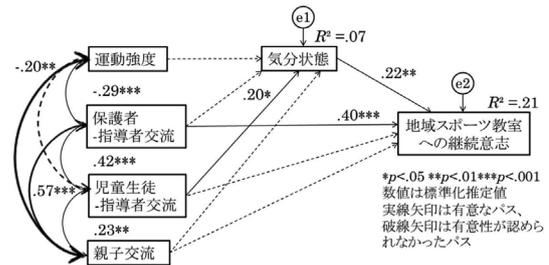


図5 地域スポーツ教室に参加した保護者における気分状態媒介モデル

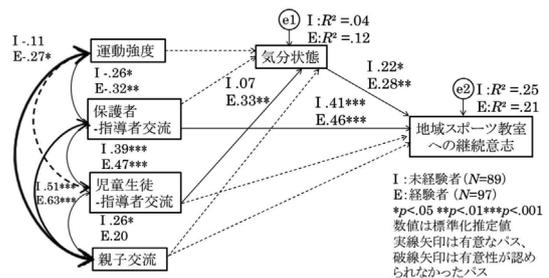


図6 地域スポーツ教室に参加した保護者における種目経験の有無による多母集団の同時解析

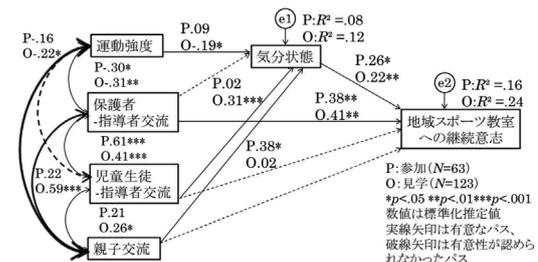


図7 地域スポーツ教室に参加した保護者における教室の参加形態による多母集団の同時解析

考察

本研究は、地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者の「地域スポーツ教室への継続意志」と「運動強度」や「指導者および参加者との交流」といった地域スポーツ教室への継続意志に影響を及ぼす諸要因との関係の中で、対象者の「気分状態」がどのように媒介しているのかについて検討することを目的とした。児童生徒および保護者の地域スポーツ教室への継続に関わる諸要因と地域スポーツ教室の継続意志に気分状態を媒介要因とした仮説モデルの妥当性を検討するためにパス解析を行ったところ、適合度は基準値を満たす値であり、仮説モデルの妥当性が確認された。

1. 児童生徒

1) 気分状態媒介モデル

パス解析の結果、運動強度、指導者交流、参加者間交流が児童生徒の地域スポーツ教室後の気分状態に正の影響を与えることが明らかとなり、ある程度運動強度が高いと感じられるスポーツを通して、指導者である大学生スタッフおよび参加している友人との交流によって児童生徒の地域スポーツ教室後の気分状態が良好となることが示唆された。また、気分状態、指導者交流、参加者間交流が地域スポーツ教室への継続意志に正の影響を与えることが明らかとなり、地域スポーツ教室での指導者や友人との交流が地域スポーツ教室の継続意志に直接影響を与えること、運動強度が気分状態を媒介して間接的に地域スポーツ教室の継続意志に影響することが示唆された。体育授業における学習意欲に情動が関係する先行研究（西田，2004）と同様に、指導者や参加者同士の交流を高め、教室後の気分状態が良好になるように運動強度を調整するなどプログラムを工夫することが児童生徒の地域スポーツ教室の継続につながる可能性が示唆された。

2) 種目経験の有無による差異

種目経験の有無による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果、参加者間交流が地域スポーツ教室への継続意志に与える影響に差異がみられた。また、パラメーター間の差の検定では有意差は認められなかったが、未経験者のみ指導者交流が地域スポーツ教室への継続意志に与える影響が有意であった。種目経験者がスポーツを継続するにあたり仲間が最も重視される（船越他，2014）ことに鑑みると、種目経験者はスポーツをともに行う仲間を求めている可能性が推測される。対して、未経験者は、初めて経験する種目がうまく行えるかという予想や見通しができないことによる不安や緊張（布目他，1995）などから

指導者との交流を重視したと考えられ、種目経験の少ない児童生徒に対しては指導者がより積極的に交流することで地域スポーツ教室の継続につながる可能性が示された。

2. 保護者

1) 気分状態媒介モデル

パス解析の結果、児童生徒－指導者交流が保護者の地域スポーツ教室後の気分状態に正の影響を与えることが示された。児童生徒と大学生が交流する姿を見ることよって保護者の地域スポーツ教室実施後の気分状態が良好となることが示唆された。また、保護者－指導者交流が地域スポーツ教室への継続意志に正の影響を与えることが示された。地域スポーツ教室の中で指導にあたった大学生と保護者の交流が良好であること、地域スポーツ教室後の気分状態が良好であることが保護者の地域スポーツ教室への継続意志に直接的に影響を与えることが示された。また、児童生徒と大学生の交流が良好であると保護者が感じるということが間接的に保護者の地域スポーツ教室への継続意志に影響することが示唆された。

2) 種目経験の有無による差異

種目経験の有無による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果、パラメーター間の差の検定では有意差は認められなかったが、種目経験者の保護者のみ児童生徒－指導者交流が気分状態に与える影響が有意であった。部活動やスポーツクラブなどと同様に、地域スポーツにおいても保護者は指導者の指導力や適切な対応を求め（國本他，2012）、子どもに対する大きな期待から子どものスポーツ活動に入れ込む、自分の夢を託すばかりに指導者やチームの対応を批判する保護者の存在が指摘されている（永井，2004；財団法人日本サッカー協会，2006）。特に、種目経験のある保護者は、地域スポーツ教室の活動のなかで指導者がどのように児童生徒と交流（指導）しているか、指導者との交流によって児童生徒がどのような反応を示しているかに着目していると推測され、指導者が児童生徒に良好に交流する姿を見ることで気分状態が良好となったと考えられる。

3) 参加形態による差異

参加形態による差異を検討するために多母集団の同時解析を行った結果、パラメーター間の差の検定では有意差は認められなかったが、活動に参加した保護者のみ親子交流が気分状態に与える影響が有意であり、見学した保護者のみ児童生徒－指導者交流が気分状態に与える影響が有意であった。地域スポーツ教室での

活動に親子で参加した保護者は、スポーツを行うことによる心理的効果に加え、親子でともにスポーツを行うなかで子どもの笑顔を間近で見たり身体が接触すること(小島, 2017)が気分状態に影響を与えたと推測される。対して、見学した保護者は、指導者と自身の子どもが積極的に交流する様子を見ることで、子どもを代理人としてスポーツを行うことによって喚起される感情を体験したと推測される(Begel, 1999)。

本研究の課題および今後の展望

1. 気分状態媒介モデルの汎用化

本研究では、平成28年にN大学にて実施された地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者を対象に検討を行い、地域スポーツ教室への継続意志と、「運動強度」や「指導者および参加者との交流」といった地域スポーツ教室への継続意志に影響を及ぼす諸要因との関係の中で、参加者の「気分状態」がどのように媒介しているかを明らかにするために仮説モデルを構築し、その妥当性について検討した。しかし、一地域スポーツ教室の参加者のみを対象としていること、調査対象者数が決して多いと言える人数ではなかったことから、本研究で得られたモデルを地域スポーツ教室共通の汎用モデルとするまでには至っていない。今後、多様な地域スポーツ教室に参加する児童生徒およびその保護者を対象にデータを蓄積することで、モデルの妥当性を検証していく必要がある。また、本研究で地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因を測定する際に使用した調査項目は、地域スポーツ教室の継続意志に関する調査尺度がみられなかったこと、児童生徒を対象とした簡便な調査尺度がみられなかったことから、「気分状態」を除いてすべて自作の単一項目であり、妥当性の確認された多面的な測定指標ではない。今後、地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因を幅広く検討し、関連する概念を含んだ調査尺度を作成すること、妥当性の確認された調査尺度を児童生徒向けに改良し使用することで、より地域スポーツ教室の現状に即した妥当性の高いモデルが構築できると考える。加えて、行う身体活動のタイプにより、気分状態に差異が生じることが明らかとなっていることから(高橋他, 2012)、地域スポーツ教室で行う種目ごとにモデルを検証していく必要もある。

2. 児童生徒と保護者の相互作用

本研究は、児童生徒と保護者がともに参加できる地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者

の両者を対象に検討を行った。しかし、保護者を対象とした検討において、「親子交流」や「児童生徒-指導者交流」といった児童に関係した項目を利用しているものの、児童生徒を対象とした検討では保護者に関係した項目が利用されていない。児童生徒のスポーツへの継続意志には、保護者の満足・コミットメント・干渉・励ましが影響することから(渡辺他, 2015)、「親子で参加すること」、「親子間の交流」といったことが、保護者だけでなく児童生徒の気分状態や地域スポーツ教室への継続意志に及ぼす影響について検討していくことで、児童生徒と保護者がともに参加できる地域スポーツ教室の意義を明確に示すことができると考える。

3. 地域スポーツ教室への継続意志と継続行動との関係

本研究は、児童生徒および保護者の地域スポーツ教室への継続意志を目的変数として検討を行った。しかし、現代社会において問題となっているのは、スポーツ環境の劣悪化による成人および子どものスポーツ実施率の低下であり、対象者の地域スポーツ教室への継続に対する意志ではなく、地域スポーツ教室への継続有無(行動)そのものが目的変数として議論されるべきである。スポーツ活動への継続意志が継続行動につながることは先行研究(徳永・橋本, 1979)において検証されているが、地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者の継続行動について検討した研究は少ない。また、大学が地域住民に対して提供するスポーツ教室は全国各地で実施されているにも関わらず、参加者の継続率が低いことが報告されている(竹中, 2005)。今後、継続行動を目的変数として加えたモデルを構築することで児童生徒が地域スポーツを継続するための促進要因が明らかになると考える。また、地域スポーツ教室への継続意志の低い、継続回数の少ない参加者に着目して分析を行うことで、地域スポーツ教室を継続する上での阻害要因を明らかにすることができると考える。

4. 今後の展望(大学の地域スポーツへの関わりの可能性)

大学は、スポーツ施設の地域住民への開放(ハードの提供)や総合型地域スポーツクラブの運営(ソフトの提供)などにより、スポーツを通じた地域活性化に貢献する存在として重要なポジションを占めることが推測され(文部科学省, 2017)、地域住民が日常的に気軽にスポーツに親しめるよう各地域の実情に応じた望ましい在り方や支援策について検討を行い、その成果に基づき改善を図っていくことが期待されている

(文部科学省, 2013b)。特に、体育学部や健康科学部などの体育系の学部・学科を持つ大学には、スポーツを専門に教える教員のみならず、運動部に所属しスポーツを専門に行っている学生や保健体育の教員免許状の取得を希望しスポーツ指導法について学んでいる学生など多くの人材が在籍している。中学・高校の部活動、さらには地域スポーツにおいて指導者不足が問題となっている今日において、その存在意義は大きい。また、提供するスポーツ環境に対して学術的な介入を行うことで、参加者の継続を促すようなより良いプログラム開発を促進すること、次世代の指導者を育成していくことが求められる。

結論

地域スポーツ教室への継続意志には児童生徒および保護者と指導者および参加者との交流が影響し、教室後の気分状態を媒介する可能性が示唆された。また、児童生徒および保護者の属性によって気分状態および地域スポーツ教室への継続意志に影響を与える要因が異なることが示唆された。

付記

本研究は、平成28年度九州地区大学体育連合および平成28年度長崎国際大学国際観光学科共同研究費の研究助成を受けて行われた。

本論文は、平成28年度九州地区大学体育連合春季研修会（於 沖縄青年会館）において発表したものを執筆、修正したものである。

引用文献

- ACSM (2011) 運動処方指針 運動負荷試験と運動プログラム 原書第8版. 日本体力医学会体力科学編集委員会, 南江堂: 東京.
- 荒井弘和 (2008) 運動の心理的・社会的効果④気分・感情・情動. 日本スポーツ心理学会「スポーツ心理学事典」. 大修館書店: 東京, pp.501-502.
- 有光興記 (2002) 質問紙法による感情研究. 感情心理学研究, 9(1), 23-30.
- Begel, D. (1999) The dilemma of youth sports. In: Begel, D. and Burton, R.W. (Eds) Sport Psychiatry: Theory and Practice. W.W. Norton & Company: New York, pp.93-109.
- 深谷和子・及川研・小川正代・猿田恵一・吉野真弓 (2000) 運動の苦手な子. ベネッセ教育研究所, モノグラフ・小学生ナウ20(1), 34-44.
- 船越達也・藤本淳也・永松昌樹・長ヶ原誠・佐々木康 (2014) スポーツの再社会化と地域スポーツ振興の関連性についてーラグビー経験者の競技復帰要因とラグビーのまちづくりに注目してー. SSF スポーツ政策研究, 3(1), 90-97.
- 橋本公雄・斉藤篤司 (2015) 運動継続の心理学 快適自己ペースとポジティブ感情. 福村出版: 東京.
- 樋上弘之・中込四郎・杉原隆・山口泰雄 (1996) 高齢者の運動実施を規定する要因: 心理的要因を中心に. 体育学研究, 41(2), 68-81.
- 金崎良三・徳永幹雄・藤島和孝・岡部弘道・橋本公雄 (1989) スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究 (1)ー婦人テニス教室参加者の場合ー. 健康科学, 11, 71-85.
- 金ウンビ・伊東明宏・中塚健太郎・坂入洋右 (2014) 音楽と身体接触を活用した運動が心理状態と対人関係に及ぼす効果. スポーツ心理学研究, 41, 19-34.
- 小島賢子 (2017) 母子関係に関する文献レビューー身体接触が及ぼす効果ー. 大阪総合保育大学紀要, 11, 131-139.
- 國本明德・正見こずえ・松本耕二・北村尚浩 (2012) 大学を拠点とする総合型地域スポーツクラブの会員に関する一考察: いきいき大東スポーツクラブのケーススタディ. 大阪産業大学人間環境論集, 11, 37-52.
- 松本裕史・村中亜弥・西村志穂・竹中晃二 (2004) 運動実践者の継続意欲を高める運動指導についてーフォーカスグループを用いた質的研究からー. スポーツ産業学研究, 14(1), 47-53.
- 文部科学省 (2002) 中央教育審議会子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申).
- 文部科学省 (2010) スポーツ立国戦略ースポーツコミュニティ・ニッポンー.
- 文部科学省 (2013a) スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業 (大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業).
- 文部科学省 (2013b) スポーツ基本計画.
- 文部科学省 (2015) 今後の地域スポーツの推進方策に関する提言.
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画.
- 鍋谷照・徳永幹雄 (2001) 運動継続のための新しいアプローチ. 健康科学, 23, 103-116.
- 中野貴博・沖村多賀典 (2014) 地域在住中高齢者における健康運動教室参加の継続的要因の検討. 名古屋学院大学研究年報, 27, 23-31.

西田保 (2004) 期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院: 東京.

永井洋一 (2004) スポーツは「良い子」を育てるか. NHK 出版: 東京.

布目靖則・田崎健太郎・河合季信・高野聰・寄金義紀・坂田勇夫・山田幸雄・嵯峨寿・齊藤武利・南隆尚・東原昌郎・原田儀子・中島節子 (1995) スケート未経験者の不安に関する研究. 大学体育研究, 17, 23-35.

坂入洋右, 木塚朝博, 征矢英昭 (2009) TDMS (Two-dimensional Mood Scale) 二次元気分尺度. アイエムエフ株式会社: 東京.

Sakairi, Y., Nakatsuka, K., & Shimizu, T (2013) Development of the Two-dimensional Mood Scale for self-monitoring and self-regulation of momentary mood states. *Japanese Psychological Research*, 55(4), 338-349.

坂入洋右, 中塚健太郎, 伊藤佐陽子, 征矢英昭 (印刷中) こころのダイアグラム: TDMS 二次元気分尺度-子ども版-. アイエムエフ株式会社: 東京.

笹川スポーツ財団 (2015) 子どものスポーツライフデータ2015.

Sallis, J.F., Prochaska, J.J., & Taylor, W.C. (2000) A review of correlates of physical activity of children and adolescents. *Medicine and Science in Sports and Exercise*, 32(5), 963-975.

高橋信二・坂入洋右・吉田雄大・木塚朝博 (2012) 身体活動のタイプの違いはどのように気分に影響するか?. *体育学研究*, 57, 261-273.

高井和夫 (2005) 子どもの身体活動を支える要因とその方策. *文教大学教育学部紀要*, 39, 43-50.

竹中晃二 (2005) 身体活動の増強および運動継続のための行動変容マニュアル. 有限会社ブックハウス・エイチデイ: 東京.

谷口勇一・瀧辰雄・永井太介・羽田野直樹・村江史年・村上智美 (2007) “子どものスポーツ”に対する期待構造 (1) -小学生とその保護者への意識調査から-. *生涯学習教育研究センター紀要*, 7, 23-37.

多々納秀雄・厨義弘 (1980) スポーツ参加の多変量解析 (1) 数量化理論第Ⅱ類による要因分析. *健康科学*, 2, 103-118.

徳永幹雄・橋本公雄 (1979) 身体運動に対する態度と行動に関する研究. *健康科学*, 1, 53-62.

永井洋一 (2007) 少年スポーツ ダメな指導者 バカな親. 合同出版株式会社: 東京.

渡辺泰弘・高橋季絵・松本耕治 (2015) 保護者の関与

と子どものスポーツ習慣形成に関する事例研究. 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 336-345.

米丸健太・鈴木壯 (2015) 日本人大学生アスリートに認知された競技環境の構造に関する探索的研究. *法政大学スポーツ研究センター紀要*, 33, 7-13.

財団法人日本サッカー協会 (2006) めざせベストサポーター サッカーに夢中な子どもたちのケアのためのハンドブック.

要旨

本研究の目的は、地域スポーツ教室への継続意志に影響を及ぼす諸要因と「継続意志」との関係の中で、参加者の「気分状態」がどのように媒介しているかを明らかにするために仮説モデルを作成し、その妥当性を検討することである。地域スポーツ教室に参加した児童生徒および保護者を対象とし、スポーツ教室実施後に児童生徒に対しては「運動強度」、「指導者交流」、「参加者間交流」、「地域スポーツ教室への継続意志」、「気分状態」、保護者に対しては「運動強度」、「保護者-指導者交流」、「児童生徒-指導者交流」、「親子交流」、「地域スポーツ教室への継続意志」、「気分状態」について回答を求めた。

パス解析を行った結果、児童生徒 ($N=272$) では、「運動強度」、「指導者交流」、「参加者間交流」が児童生徒の地域スポーツ教室後の「気分状態」を媒介して「地域スポーツ教室への継続意志」に正の影響を与えること、保護者 ($N=186$) では、「児童生徒-指導者交流」が地域スポーツ教室後の「気分状態」を媒介して「地域スポーツ教室への継続意志」に正の影響を与えることが示された。以上のことから、地域スポーツ教室への参加者の地域スポーツ教室への継続意志には、児童生徒では運動強度、指導者との交流、参加者間の交流が、保護者では児童生徒と指導者の交流が良好であると保護者が認識することが気分状態を媒介して影響している可能性が示唆された。